

日曜聖書講筵（婦選会館 公開集会）

十二弟子

――マルコ伝第3章13～19節――

1964年6月28日

小池辰雄

十二支派 神さまの選び 秘伝的なもの 靈的人格 御言の権威者 四人組の三班 幕屋的展
開 ユダ的なもの 武士道的な精神 使徒的信仰

【マルコ3・13～19】（私訳）

¹³ところで、イエスは、かの山に登り、御意に^{みこころ}適った者たちを呼び集められて、彼らは御許^{みもと}に来了。¹⁴そこで、十二人をお選びになった。彼らを自分の御許に置いたためであり、¹⁵更には宣教に遣^{つか}わし、また悪霊を追い出す権威を持たせるためであった。¹⁶そのようにして、この十二人をお選びになった。そして、シモンにペテロという名をつけ、¹⁷またゼベダイの子ヤコブと、ヤコブの兄弟ヨハネ、彼らにはボアネルゲ、即ち雷の子という名をつけられた。¹⁸次にアンデレ、ピリポ、バルトロマイ、マタイ、トマス、アルパヨの子ヤコブ、タダイ、熱心党のシモン、¹⁹それからイスカリオテのユダ、このユダがイエスを裏切ったのである。

●十二支派

「十二弟子」と題しましたが、あるいはこれを「十二使徒」と言ってもよろしい。例えば、マタイ伝10章1節を見ますと――この並行記事が、マタイ伝10章1節から5節、ルカ伝6章12節から16節ですが、

「¹斯^{かく}てイエスその十二弟子を召し」

「ドーデカ マテータス」「十二弟子」という言葉が出ています。それから2節の方に、
「²十二使徒の名は左^さのごとし」

「ドーデカ アポストローン」「十二使徒」と書いてある。同じマタイ伝の同じような箇所にも、片一方は「弟子」といい、片一方は「使徒」といつている。

「十二」という数は、これはご承知の通り、イスラエルでは完全数を表わす。旧約から新約に渡ってこの「十二」という数をいろいろ研究してみたら、面白いことですが。特に、民数紀略13章3節から16節のところに――旧約聖書の民数紀略は「モーセの第四書」と言われるところですから――モーセがカナンの地に探偵みたいな者を、使いを送るわけです。そ



のときにやはり、十二支派から選ばれている。

「³モーセすなわちエホバの命にしたがいてバランの曠野よりこれを遣わせり、その人たちは皆イスラエルの子孫の領袖たる者なり。⁴その名は是のとしルベンの支派にては……⁵シメオンの支派……⁶ユダの支派……⁷イッサカルの支派……⁸エフライムの支派……⁹ベニヤミンの支派……¹⁰ゼブルンの支派……¹¹ヨセフの支派……¹²ダン
の支派……¹³アセルの支派……¹⁴ナフタリの支派……¹⁵ガドの支派……¹⁶是すなわちモーセがその地を窺わしめんとて遣わしたる人々の名なり。時にモーセ、ヌンの子ホセアをヨシユアと名けたり。」
（民数紀略13・3～16）

このヨシユアが特に一番のモーセの後継者としてやがてカナンの地に入っていくわけですから、申命記33章のところに、

「神の人モーセその死ぬる前にイスラエルの子孫を祝せり。その祝せし言はかくのごとし云く²エホバ、シナイより来り……⁵民の首領等イスラエルの諸の支派あい集まれる時に彼はエシユルンの中に王たりき。⁶ルベンは生きん死にはせじ……⁷ユダにつきては……⁸レビにつきては……¹²ベニヤミンにつきては……¹³ヨセフにつきては……¹⁸ゼブルンにつきては……²³ナフタリにつきては……²⁰ガドにつきては……²²ダンにつきては……²³ナフタリにつきては……²⁴アセルにつきては……²⁶エシユルンよ全能の神のごとき者は外に無し、これは天に乗りて汝を助け雲にのりてその威光をあらわしたもう。²⁷永久に在す神は住所なり。下には永遠の腕あり。」

「永遠の腕」というのは有名な言葉です。

敵人を汝の前より追いはらいて言いたもう、滅ぼせよと。²⁸イスラエルは安然に住みおり、ヤコブの泉は穀と酒との多き地に独り在らん。その天はまた露をこれに降だすべし。²⁹イスラエルよ汝は幸福なり。誰か汝のごとくエホバに救われし民たらん。エホバは汝を護る楯、汝の栄光の剣なり。汝の敵は汝にへつらい服せん。汝はかれらの高処を踐ん。」（申命記33・1～29）

というような勝利の祝福をこの十二支派に祈っているモーセの言葉です。

それから、ヨシユア記24章というのは、これもきわめて歴史的に大事なところだ。

「ここにヨシユア、イスラエルの一切の支派をシケムに集め、イスラエルの長老首領裁判人官吏などを招きよせて諸共に神の前に進みいで」

云々と。イスラエルの歴史をアブラハムからずっと説き起こしまして、ここでもって十二支派が宗教的な盟約を結んで、シケムにおいてその誓いをなすところだ。そして、19節で、

「ヨシユア民に言いけるは汝らはエホバに事うること能わざらん。そは彼は聖神また妬みたもう神にして汝らの罪咎を赦したまわざればなり。」



と言って、神の審判を告げ、そして、しかしながら、

「²¹民ヨシユアに言いはけるは、否我ら必ずエホバに事^{つか}うべしと。²²ヨシユア民に向いて汝らはエホバを選びて之に事えんといえり。なんじら自らその証人^{あかしびと}たりと言ひければ、皆我らは証人なりと答う。」（ヨシユア24・1～22）

神に対する自分たちの忠誠をそこで誓わせ、そしてここに宗教連合というものが出来上がったという非常に歴史的なところなんです。もちろん、これはこの場合に他神^{あだしかみ}につかえていて、信仰が乱れていたから、それから特に古き信仰に帰って――「神を選ぶ」というような言い方はちよつと妙ですけれども――どこまでもヤーヴェーの神に、エホバの神に忠誠を誓うというわけです。

「お前たちはその言葉の故に自ら証人だ」

というようなところです。これは歴史的に非常に十二支派というものが役割を果たした。それで、十二支派という、そういった歴史的なイスラエルの選民の数、支派の数がやはりここにも「十二人」ということに反映してくるわけです。

学者によりましては、

「イエスはこの時に十二人選んだわけではなからう、後からそれを整備したのだらう」

というようなことを言う人もあります。けれども、マルコとマタイとルカ、それから使徒行伝1章13節のところにも出ていますが、その名前を見ますと、あるグループが出来ているわけです。

●神さまの選び

マルコ伝の方には書いてありませんが、ルカ伝6章のところに、

「¹²その頃イエス祈らんとて山にゆき、神に祈りつつ夜を明したもう。¹³夜明^{よあけ}になりて弟子たちを呼び寄せ、その中より十二人を選びて、之を使徒と名づ

けたもう。」（ルカ6・12～13）

と書いてある。十二人を選ぶ前に、イエスは徹夜をして祈られた。このことが非常に大事な前提となっている。私たちも、信仰生活の中で時には本当に夜を徹して祈るような、そういうこともまた大切なことでありまして、今は誠に祈りが乏しい。キリスト教が本当に展開するかしないかは、その信者の祈りにかかっています。一番大事なことは、私たちがただ祈禱会をするということではなくて、日常座臥^{ざが}、本当に祈り心地で、また静かに本当に真剣に祈る。

祈りは神さま相手のことです。私たちは自分に対しては、あるいは人に対しては、だいたいいい加減なことがしばしばあるわけです。けれども、神さまに対して、これはいい加減であることはできない。祈りだけは絶対に気持の浮いた、いわんやまた、何か偽りな



なんていうことは有り得ないことです。神は詩篇139篇にある通り、我々の心に一つの思いがあればそれを知り給う。口に一つの言葉があれば、それを既に知り給うという、神さまです。我々はいかに真でなく^{まこと}てはならないかということは、対神のことを考えれば、自然に分かることです。

イエスがなぜ、十二人を選ぶのに、そんなに徹夜をしてまでも祈らなければならなかったのか。大体、今は人を選択をするときに、どれだけ学問があるかとか、どの学校を出たとか、人物はどうであるかとか、また、環境はどうである、生い立ちはどうであるとか、いろんなことがその条件にくるわけです。けれども、この神さまの選ぴというものは、これはパウロが既にコリント前書1章の終りの方でも言っている通り、

「この世的に価値のないような人たち、智慧のないような人たち、また弱いような人たち」

と言って、とにかく、この世的にはどうも選ぴからはずれそうな者たちを「神の民」として選ばれる。しかしながら、

「学問があるかないか、財産があるかないか、血筋がどうであるかである」

とか、ということは一つもこの選ぴの対象にならない。福音の世界の選ぴというものは、神さまの選ぴというものは、その魂の姿です。魂の姿が本当に砕けの姿、即ち自己義認ではなくして——実はパウロはその自己義認のチャンピオンであつたが——

「その魂が本当に神の前に砕けるか砕けないか」

でもって、

「天国に入るか入れないか」

の、これが非常に大事な条件であると思います。

私たち人間は、五十歩百歩みんな躓^{つまず}いたり転んだりというような罪びとです。そんなことを品定めしたって始まらない。問題は、本当に神の前に砕けの魂であるかということ。キリストが一番喜ばれたのは、全的に自分を投げかけ、そこに砕け投ずるところの魂である。ルカ伝15章を見ても、あるいはザアカイの姿を見ても、あるいは十字架上のあの盗賊の姿を見ても、みなキリストの受け入れられたのはそういう魂である。キリストが、「これは」と言つて攻撃されたのは、パリサイ人^{びと}たちでありました。

●秘伝的なもの

そういうわけで、ここでもって選ばれたときの神の聖旨は、そういつたご連中の名前を特にキリストに示され、また特にキリストがこの選ぴの中で、おそらく苦慮されたと思う者は、最後のイスカリオテのユダという人間だったと思う。このことは、キリストのような方ですから、もう既に洞察しておられたと思います。キリストはおそらく選ぴたくはなかったのではなからうかと思ひます。けれども、イエスはこれを選ばせられた。そこに神



の聖旨が、実に深淵な聖旨がある。そう思います。イエスがなぜ、夜を徹して祈られたかは、既にゲッセマネの祈りの苦しみ祈りの前提として、前段階として、十二使徒を選ぶときに既にその十字架が来ていたと思われれます。

ルカ伝のこの記事は非常に大事な記事です。夜もすがら祈られた。そこに日本語の訳にはただ「山」とありますが、これは定冠詞が付いていて「あの山」という言い方でして、当時は「あの山」と言えば、おそらく、キリストが山上の垂訓をされた山ではないかと思えます。あるいは別などこかかも知れませんが、既に知られたところの、よくキリストが祈られた山に相違ない。

そこで、「自分の側^{そば}に置くために」と書いてある。「自分の側^{そば}に置くために」という、実に簡単な表現ですけども、これはいわゆる「とりまきを作るため」という意味ではない。イエスは素晴らしい方ですから、イエスの伝道では大勢集まって来ました。けれども、特にこの福音というものは、福音の奥義とは、万人にそう直ぐ伝わるものではない。いわば秘伝的なものである。「秘伝」とまでは、少し言葉の概念が違いますけれども。しかしながら、神の奥義ということ——「奥義」という字は「神秘」という字ですから「秘義」と訳してもいい——この神秘的な奥義を、秘義を伝えるには、やはり近く自分の側にいて、そしてこれを語り伝えるという必要がある。

「大勢の者には^{たとえばなし}譬話をもって言われたが、弟子たちには特に奥義を言われた」

というように、他のどこかに書いてあったはずですが、その福音書記者の言葉をみても分かるように、特に「近く置かれた」というのはそういうことです。

まあ、私が教わった頃の藤井武先生はおよそ、いわゆる伝道というようなことはあまりなさらなかった。自宅の集会でごく13、14人位の人を相手にして語っておられた。しかし、私は一回として「今日はつまらなかった」とか、「今日はどうも」というようなことを覚えたことがあります。毎回、私は何か満たされて帰って参りました。午後からは、ギリシャ語だのヘブライ語だの、それからダンテだの、カントだの、プラトンだのと、いろいろ読書会を開いてくださったが、それに連なつたのは、本当に2、3人か、3、4人というところですね。私は藤井先生の集会には前後5年間、一回も欠席なしに完全にこれを通してました。夏は、集会もないのに藤井先生の家に押しかけて行って、一夏とうとう日曜を過ごしたというようなこともあって、先生も迷惑だったかと思いますが、ま、そんなことで、私はこのところを読むときに、本当に身親しく藤井先生という師に接したということは——ちょうど大学生時代ですから——私にとつては掛け替えのない一つの大事な経験で、私の信仰の一番土台を築いていただいたのはあの時期なんです。

我々の集会は、こういうように多少は大きくなって来ましたが、しかし、やはり集会に身親しく、できるだけ集会には出てくる。私は一回といえども正直、おろそかにやつたことはないはずですが、私の牧会の仕方はなっていないません。まことに、皆さんから何を批



判されても、私は抗弁できないようなやつです。けれども、聖書の真理そのものに向かつては、私は集会を一つもおざなりにしたことはないはずです。とにかく、一番大事ななくてはならないものというものを突っ込んで——人間小池がどんな惨憺^{さんたん}たるやつであつても、私はこの福音の証し人として神に召されていると私は確信いたしますので——死に至るまでこれを貫かざるを得ない。十字架の恩寵と聖霊の恩寵の事態は、特にこの御霊のバプテスマの事態は、今のキリスト教界において大事な課題であるので、これを賜った者として、証し人とならざるを得ない。もし、我々の集会がこの御霊の証、御霊の迫力の証がないならば、もう集会は、今日でも私は閉じなければならない。

●霊的人格

キリストが弟子たちを特に身親しく伴れて、山へ行こうと、あるいはどこかへ行つて伝道しようと、みんなついて来た。弟子たちが常住座臥、キリストとなるべく接して、そしてそこから具体的に真理をつかむ。キリストの真理は身に付けたものですから、身に付けた真理は、ただ書かれた文字からではなくして、その全存在からにじみ出てくるころのものである。霊的人格^{霊的人格}という。イエスという人は——今までの無教会では、「人格」ということは言われています。しかしながら、ここに「霊的」という言葉をもう一つ加えなければならぬ——神の御霊によつて生きているところの人格でありまして、いわゆる道徳的人格とはまた次元が違う。この霊的人格であるところのキリスト、これにはどうしても、直接に霊的な波動を受けて、薫育、教育されるのが本当の教育である。

イエスは、それでもなお弟子たちが本当に自分に従つて来ない。やがて、自分は独りで十字架につく。そのことが見えておられる。けれども、本当の事態を今分かるか分からないかは別問題として、とにかく本当の事態を水を割らずに語り、水を割らずに伝え、どんなに躓いても、それを厳しくまた勇ましくキリストは進んでおられる。これがやがて、彼らが本当に悔改めて、そして、聖霊のバプテスマを受けた時に初めて、イエスが言われたこと、なされたことがみんな生きてきたわけです。

私の兄は、終りの5年間くらい、家族と親戚の中でたった一人のクリスチャンでした。私は、兄ととにかく生活を共にして、同じ部屋に寝起きしてました。私はもちろん「耶蘇教^{やそ}は」なんて言つて、生意気に——中学生の4年か5年生ですが——毛嫌いをしていた。けれども、彼が亡くなって、私がこの福音の中に飛び込んでみたら、兄の生活そのものが、その言つたこと^しが為たことがみな私にしみ込んできた。そういうわけのものでありまして、福音を相手が受けとると受けとらざるとに拘らず、とにかく、生^{なま}に、水を割らずに伝えていく。存在をもつて伝えていく。それはやがていつか、これに接した人たちが、目が醒める時がくる。

「二粒の麦、地に落ちて死なずば、多くの実が稔らない」

と言うが、この贖いの原理が、救いの世界ではやはりキリストを受けとった人たちによつ



て展開していく。どんなに伝道が失敗そうに見えても、心いっぱい、力いっぱいに生きた人は決して失敗していない。必ずそれは本当の勝利です。

イエスが特に少数の者を身近に置いて、教育された。この中にいる男性の方々は——私はなにもイエスではありません。けれども、とにかく伝道を第一線にして動きだしている私です——どうか、人間小池にお躓きにならないで、この土の器、破れの器を通して、何が発生しているか、そこをいつも見て、躓かないでいていただきたい。

我々人間の間はいつも、キリストの十字架が立ってなければ、永存しません。どんなに立派そうにみえても、それは決して続きません。また、続いたとしても、それは本ものではありません。十字架を立てて進んでいるということにおいては、無教会は確かに善き伝統を内村先生から持っております。無教会の生命がもしあるとするならば、とにかくそこに十字架が立っているということです。ただ、その十字架が、御霊の事態と本当に相即していけば、もつと素晴らしく展開するであろうというところに、課題があるだけのことです。

●御言の権威者

キリストは、

「自分には受くべきバプテスマがある。十字架というバプテスマがある。そして、この火が燃えたらば、御霊の火がその後に燃えたらば、もう何をかせん。

そうしたらば、本当だ」

と。キリストは復活なさった方で、この御霊の力を既に内在しておられた方ですから、これは復活せざるを得ない。キリストには、そのような、先の先までの勝利の確信がおりでありましょうから、

「今みんなが分からなくても、今たえ躓いても、その中に自分を裏切る者があつても」

というところを、とうとうこの祈りで突破されて、このように選ばれたと思います。

この一夜の、夜を徹してのキリストの祈り。私たちも、時々それぞれの生涯において、大事なときには本当に夜もすがら祈る。そういったようなことが自然に、必然的にあつて然るべきだと思います。

15 更には宣教に遣わし、また悪霊を追い出す権威を持たせるためであつた。

と。そこにはつきりと書いてある。伝道は、仏教の言葉で言うところの「伝燈」、燈火を伝えるということ。道を伝える。燈火を伝える。キリストの伝道は、伝道であると同時に伝燈である。もう一つは、悪鬼を追い出す。霊闘である。霊の闘い。伝道と言うときに、特に内容となるのは御言です。

「わが言は霊なり、生命なり」

と。聖書が伝えているところの、創世記から黙示録まで、神の言である。この神の言、霊言、



これが即ち、一番大事な内容です。しかしながら、それはどこまでも、霊言であり、かつまた身につけてそこを歩む道である。我々は聖書を読んで、神の言を本当に身に体して、神の言葉を食らって生きる。それが本当に食らわれるためには、片一方にこの「伝燈」――「燈」は即ち燈火、即ち霊のことです――「伝霊」なんていう言葉はないけれども、御霊を伝える。キリストは弟子たちに言葉を語りながら、キリストという実存から発するところの聖霊が伝わっていく。この霊と言とはもちろん離すことができません。

そういう意味において、この宣教のことはただキリストの言葉をおうむ返しに伝えるのではなく、本当の伝道にはならない。それが本当に、伝える人において一つの神的な権威を持つためには、その権威の主権者は御霊です。御霊が権威の主権者である。何か教会信条でもなければ、教会制度でもなければ、長老でもなければ、何でもなし。この権威の所在は御霊にある。皆さん一人びとりは、クリスチャンは即ち、御言の権威者にならなければ、本当のクリスチャンではない。

「また悪霊を追い出す権威を持たせるためであった」

と。諸々の悪の事態はサタン（とりこ）の支配の下において行われる。サタンが働いて、我々はサタンの虜（とりこ）になって、いろんな間違いを犯したりする。このサタンとの闘い。また、それに憑かれて、精神的にもまた肉体的にも欠陥をきたして、いろいろな不治の病が起きているようなことがある。けれども、キリストが、そいつに働いているところの悪霊を追い出すと、それが治ってしまう。それはみんな悪霊の働きであるから、

「出よ！」

と言うわけで、キリストはそれを出してしまう。私などでも、

「聖名によりて、出よ！」

と言って、そういった働きを出した経験がございます。それは、私たちは直接にやってはいかん。どこまでも、それは「キリストの聖名において」です。ペテロが

「我に金銀はなし。けれども、イエス・キリストの聖名によって、汝、立てよ！」

と言ったら、跛者（あしなえ）が立った。

御霊が私たちに内住する事態は、絶対に私たちが神の前に平伏（ひれふ）しの魂になつていなければダメです。神の前に平伏しの魂でなかったならば、あるいは、霊的な事態が起きるかもしれないけれども、そいつはサタンのになる。それは御霊ではなくなる。大事なのは砕ける魂です。さつき言った、砕けであるし、私なき魂です。

悪かったら、即刻、

「間違っていました」

と、サラリと投げ出すところの魂でなければダメです。こちらに何かしこりがあつたり、何かごまかしがあつたり、曇りがあつたならば、神さまの御霊は働き給わない。キリストの十字架で完全に担われて贖われた、この恩寵の下において、この御霊は働き給う。



そのことは、まだ十字架がないから、弟子たちが直接、素晴らしいキリストに接しているながら——ある力は働いて、御言も伝えなければ——それはまだ前哨的であって、また本式的ではなかった。それが本式的になったのは、使徒行伝に行ってからです。ペンテコステを経て、聖霊の降臨を受けてからです。

●四人組の三班

キリストが選ばれたそのやり方と目的というものは、直々に自分と生活を共にし、御言を本当に化体せしめ、御霊をそこに注ぎ込んで、そして、悪鬼との闘いをなし、病める者をまた苦しめる者をその霊的な縛りから解いてやることです。

そこで、ここに選ばれた十二人の名前を少し調べてみますと、

16 そのようにして、この十二人をお選びになった。そして、シモンにペテロという名をつけ、¹⁷ またゼベダイの子ヤコブと、ヤコブの兄弟ヨハネ、彼らにはボアネルゲ、即ち雷の子という名をつけられた。¹⁸ 次にアンデレ、ピリポ、バルトロマイ、マタイ、トマス、アルパヨの子ヤコブ、タダイ、熱心党のシモン、¹⁹ それからイスカリオテのユダ、このユダがイエスを裏切ったのである。

ヤコブとヨハネは兄弟です。シモンとアンデレが親しい間柄です。一番先に出てくるのが、この「シモン・ペテロ」なんです。マタイ伝、マルコ伝、ルカ伝を見ましても、一番先に出てくるのがこの「シモン」です。12が4人ずつの3つの組になっている。4人がまた2人ずつになっている。終りがちよつと3になって欠けているときがあるんですけれども。伝道に遣わした時にも、

「2人ずつ遣わした」

ということが書いてある。「2人」という単位は非常に大事です。これを倍にして、4。赤穂義士は3ですね、3人組になって討ち入りをした。互いに助ける。まあ、凄いですよ、あれで一人も傷つかないのだから。一人も殺されないで、大した討ち入りですよ。本当に気合が一つになっているからね。

そういうように、シモン、ヤコブ、ヨハネ、アンデレが第一班。第二班が、ピリポ、バルトロマイ、マタイ、トマス。第三班が、アルパヨの子ヤコブ、タダイ、熱心党のシモン、イスカリオテのユダ。一番先のペテロと、第二班のピリポと、第三班のヤコブは、どれを見てもみな一番先にその名前が出てくるんです。順序から言っても、各班のこれが代表者だったということが分かる。これは面白いんです。四人組の三班ということに自然に選ばれて、そして、一つのグループをなして、全体がまた、三位一体ではないけれども、三が一になっている。自然にそういうように選ばれたと思われる。

集会というものもそういったことで、ここにはレバノン会、ヨルダン会、ガリラヤ会という班が来ておりますが。また、どういう規準でもいいけれども、その中で幾人



かずつのグループというようなものを、今日午後からそんなことも面白半分にも考えてもいいけれども。

とにかく、そういったものがあるということも大事なことだと思う。それは何のためかという、党派を作るためではない。それはどこまでも、有機体的な結び合いです。そして、責任をもって、その誰かが欠けた場合には、「今、どうしているだろうか」と安否を問う。病気の時には見舞う。いろいろな問題があつたら、それを慰め励ましてあげるとか。というようなことで、そういった交わり――やがて後で、兄弟姉妹というところが出てきますけれども――そういうことを、皆さん、具体的に推進されていかれるといいと思います。

問題は、何をするにしても、中心は本当に聖霊におけるところの生命とその愛とが動いているかということ。そのためには本当に一人びとりが祈りの魂として、キリストの身体として本当にお互いに助け合っている。人を非難することではない。人の善きところを見て、互いに助け合っていくということ。どこの集会でも、教会でも、いろんな問題がありますよね。けれども、大事なことは私たちの集会が――今日はちょうど半年の終りとまた次の半年の始めになるので――そういうことをお互いに本当に気持ち良く出発しようと、午後は話し合いたいと思っております。

そういう、生命体として、キリストの愛の本当の集団として、気持ち良く、今日の天気のように明るく、キリストの光と熱とをもつて進んで行くということを、切に私も念願しているものでございます。常に私たちは過去を乗り越え、現在において常に未来をその中に受けとりながら、進んで行く。「前向きの態勢」なんていう言葉がありますが、本当の意味における「前向き」というのは、福音を受けているところの私たちが本当の意味において前向きであるはずで。

そういう意味において、この十二使徒という十二弟子――何もこの数は問題じゃない――我々のグループというものが、

「さすがに、あそこには何があなくても、御霊の生命と愛とが動いている」という、そういう団体で、エクレシア、幕屋、集会でありたいと思います。

ちょうど、はじめに4人の人たちがあがっていますが、特にこの4人が、キリストが大事な時に――特にそのうちの3人という場合もありますけれども――シモンとヤコブとヨハネとアンデレ――アンデレは時々欠けますけれども――この4人がいつもキリストの大事な時に顔を出す、たとえば、マルコ伝5章を見ますと、36節、

『36 イエス其の告ぐる言を傍より聞きて、会堂司に言いたもう『おそ懼るな、た
だ信ぜよ』³⁷ 斯てペテロ、ヤコブその兄弟ヨハネの他は、ともに往く事を誰
にも許し給わず。

と書いてある。ここでは3人ですけれども。特にこういう人たちを選んだというのは、おそらく、祈りににおいてイエスを本当に助ける人たちだったと思います。



40 人々イエスを嘲笑^{あざわら}う。イエス彼等をみな外に出し、あざ笑ったり、批判したり、疑ったりしている者は、祈りの世界ではじやまになりますから。それでこれを外に出した。

幼児^{おさなご}の父と母と己^{おのれ}に伴える者とを牽^ひきつれて、幼児のおる処に入り、⁴¹ 幼児の手を執^とりて『タリタ、クミ』と言いたもう。少女よ、我なんじに言う、起きよ、との意^{こころ}なり。⁴² 直ちに少女たてち歩む、その歳十二なりければなり。彼ら直ちに甚く驚きおどろけり。』(マルコ5・36～42)

ヤイロの娘の復活のところでは。

また、マタイ伝17章は有名な「変貌の山」のところでは。

「六日の後、イエス、ペテロ、ヤコブ及びヤコブの兄弟ヨハネを牽^ひきつれ、人を避けて高き山に登りたもう。² 斯て彼らの前にて其の状^{さま}かわり、其の顔は日のごとく輝き、その衣は光のごとく白くなりぬ。」(マタイ17・1～2)

という事態です。そういうようにして、キリストが自然に選ばれた、その彼らは一体何であつたかという、それは聖書知識でも何でもない。問題は魂です。魂が本当に祈りの魂であつた。

●幕屋的展開

ハルナツクという教会史家の言葉に、

「キリストの思いやりと熱意とはただ神の国と一人びとりの魂とにのみ向けられた。この点における彼の唯一の後継者は、一二〇〇年後のアッシジの聖フランシスである」

という言葉がある。非常に傾聴すべき言葉です。フランシスという人がまた、そういうカトリック教団の中にありながら、全くキリストの僕として、地で行ったところの人です。

無教会は何の組織も持たない。これは内村先生の無教会精神の非常に大事なところの一つです。我々もその意味において、いわゆる組織や規則は別に規定してはおりません。自ずから在ることは、その時その時に定められますけれども、何もそれが一つの信条的となつたり、あるいは規約となつたりするようなことではないわけです。

また、あなたの方で地方に行かれる方があれば、どうか、そこでもって幕屋を大いに張つていただきたい。それは決して分裂ではなくして、どこまでも、お互いに本当に同じ御霊における、志を同じくしたところの幕屋的展開として進んでいく。私は、

「皆さんはいつまでも私の所に来てください」

なんて思っています。私は最後に一人残されて結構なんです。どしどし、神の召命を受けたら、展開していく。そして、お互いに助け合う。私も巡回をいたしまして、応援にも参ります。そういったこだわった気持はございません。キリストの御霊と言うならば、もはやしこりのない、気持のよい自由な展開を本当に私たちは気持よくして行きたいと、こ



う思っております。

イエス・キリストの弟子たちとして、キリストの体を展開する者として、

「御霊のあるところに本当の自由あり」

「御霊のあるところに本当の一致あり」

と、パウロの言うところです。実に、パウロという人はなんと素晴らしい福音の構造を持つていたか。パウロの書簡を読めば読むほど、私たちは驚嘆するばかりです。

●ユダ的なもの

キリストは十二使徒を選びましたけれども、しかし、その中に一人、イスカリオテのユダという裏切り者を、どうしてもキリストは選ばなければならなかったところに、彼の十字架が既に隠されてある。これは、しかしながら、やはりユダという人物が神の大いなる摂理の中では必要であつた。それは、

「禍害^{わざわい}なるかな」

とキリストは言われたけれども、実は人類が、我々自身がイエス・キリストに対して、ユダ的なものを持っている。

「キリストを十字架に架けたのはあの当時の人たちで、私だったら架けなかった」

なんてことは絶対に言えない。そのような罪びとであるところの、キリストに背きの、神の「怒の子」であるところの我々は悲しいかな、禍害なるかなですけれども、このユダがその役割を果たさせられた。しかし、ユダはいなくても、キリストはおそらく十字架に架けられたに相違ない。だから、ユダというのは、あるいは、ないほうがよかったかも知れません。しかし、そこにまた一つののつびきならない道があつた。神さまの摂理の世界は説明はできません。人間の背きというものがついに必然、キリストを十字架に架ける。そして、十字架は、架けられたのではなくて、キリストが

「自ら我はこれに架かる」

と、ヨハネ伝で言っておられる通りです。これが贖罪という、神の意志を彼らの過ちを通して受けとられたところの恩寵です。我々の過ちを逆に恩寵として返してくださったというところに、福音の凄さを、本当の救い、本当の勝利、本当の愛というものがどのようなものであるかということをしみじみと思うわけです。

●武士道的な精神

そのようにして、イエスがこの十二使徒を選ばれた。その目的は、またそのやり方、その姿はどうであつたかということを一応、我々は見たと思います。何もこの十二使徒に限らず、我々自身が本当にキリストのみそば近くに、御霊をもって今天界に居られまた御霊をもって我々のそばに近く来たり給うところのキリストのみ許^{もと}近くに――こないだからし



ばしば出てくる迫り行くところの——御許近く迫り行く実存として、私たちがキリストに御霊において迫って行く。即ち、聖書に深く親しんでいく。

私は学校で学生に、

「ドイツ語の勉強をしようとしたって、それはダメだよ。嫌になる。ドイツ語に親しみなさい。勉強ではない。親しむことが大事だ。とにかく、毎日読め」

と言うんです。ドイツ語のない日はないというくらい、5分でも10分でも、新聞を読むように、電車の中でもどこでもいいから、とにかくドイツ語の本を開いて読めと。ドイツ語にかぎらず、語学の勉強となったら、勉強ではない、語学はただ親しむことだけ。秘訣はただそれだけだと。

私は、なにも軍隊を復活しろとは思いませんけれども、しかし、軍隊的な、命令に服従して水火も辞せずというような魂は実は、信仰の世界で非常に大事なことです。キリストが褒められたところの「百卒長」にはこの信仰の素晴らしさというものがある。あの軍人の精神と相似通う。武士道的な精神と似通うものがある。これは内村先生が

「武士道にキリスト教が接ぎ木されるときに本当に素晴らしい日本人になる」と言われたことと、一脈通ずるものがあります。

聖書に本当に親しみ、そして、聖書の言葉を命令のごとく実行する。その言葉通りに。言葉通りにということは、「言葉の精神」ということです。その言葉の精神をつかまえて、これを実行に移すということは——なにも私は律法を言うのではなくて——これは御霊が本当に来れば、御霊の力が来れば、「はいっ」と言つて、それが実存の中に展開していく。

弟子たちはキリストに親しくしていた。けれどももちろん、この場合の弟子たちはただ空間的にいくら近かったって、それはダメなことはキリストは知ってるんだ。問題は、霊的に近くなることです。

十二人から一人欠けた。十二人のうち、とうとう裏切者が出て、一人欠けてしまった。そうしたら、何をしたかというのと、使徒行伝1章15節以下に、23節から、

「²³ここにバルサバと称えられ、またの名をユストと呼ぶるヨセフ及びマツ

テヤの二人をあげ、²⁴祈りて言う『凡ての人の心を知りたもう主よ、ユダ己が所に往かんとて此の務と使徒の職とより墮ちたれば、その後を継がするに、

此の二人のうちいずれを選び給うかを示したまえ』²⁶斯て^{かく}闇せしに闇はマツ

テヤに当たりたれば、彼は十一の使徒に加えられたり。」(使徒1・23～26)

とある。祈りは、それは祈りでいいけれども、くじを引いて当ててしまったという。これは、カール・ヒルティーも「これは残念なことをした」ということを『幸福論』の中で言っています。なにも、そんなことをして補う必要はない。そういった、キリストが十二弟子を選んで、その十二の数にまたこだわってしまったって、一人が欠けたら、一人をまた選んで十二にしたなんていうところは、もうそろそろ教会精神が働き始めた。そんなものは欠けたら



欠けたでいい。欠けたって、神さまはちゃんと補う一人を置いている。言うまでもなく、パウロです。驚くべき使徒が現れて来た。マッテヤなんか、なんだか後は訳が分からない。パウロという人物は、

「人よりに非ず、人に由るにも非ず。イエス・キリスト及び之を死人の中より甦えらせ給いし父なる神に由りて」

と、御霊によつて自分は選ばれたと言う。パウロはなにも威張つて言うのではない。彼は実にけしからんやつだった。「俺こそは」と思つて、大いに意気揚々として、キリストを信する者を迫害していた。

「サウロ、サウロ、なんぞ我を迫害するか」

と、パリサイ中のパリサイをキリストは捕まえて、こいつをひっくり返してしまった。

「とにかく、あついは真剣なやつだ。あいつを逆用してやる」

というのが、キリストの、パウロの本質を見た見かたであつた。

●使徒的信仰

人間というものは、どの人にもみんな大事なものがあるんです。それをどのように活かすか、神さまは、あなた方一人ひとりをもどのように仕立てようとなさつていらつしやるか。そのことを祈りをもつて伺うことです。そして、神さまが喜ばれる器と——どなたでもみな天下一品ですよ——切になつていただきたい。私たちの福音が聖霊の福音であるならば、必ずそれは成る。単なる聖書の研究とか、単なる学問とか、事業とか、そういうことではない。神の言は御霊によらなければ、死んでしまう。霊は本当に活かし、儀文は殺す。私たちの使命は正に、このキリストの御霊の権威、それを本当に御言をそのような権威あるものとして、活けるものとしてつかまえる。進んで行く。

私に御霊の火が消えない限り、私は死に到るまで伝道せざるを得ない。皆さんは、この福音を受けている限り、そのようなもう居ても立つてもいられないような使命を、本質をいただいていらつしやる方です。

実は隠されたる選び人が一人いた。それはパウロです。キリストはどうとう、パリサイ人パウロをひっくり返して、キリストの本当の僕にした。神の使徒とした。十二使徒は、何も十二の数に限らない。それから限りなき使徒が次から次へと現れて、キリスト教の歴史は今日に至っている。

だから、私たちの信仰は、パウロ的な使徒的信仰です。キリストの兄弟やコブは、エルサレム教団の親方でした。けれども、肉においてキリストの兄弟であつても、霊において本当にキリストに選ばれたところの、御霊のキリストに、復活のキリストに選ばれたところのパウロは、事実が証明する。彼は本当に使徒となつた。

私たちの信仰は正にこの使徒的信仰ということを目指しておりますのは、その意味です。



皆さん一人ひとりが本当に、使徒的信仰者として、証し人、証人として進んでいただきたい。我々は前半年を終わりましたが、いよいよ、希望とまた歡喜に燃えて進んで行きたいと思えます。このダメのカスの私たちは、何の資格もなしに、本当に恩寵によつて選ばれ、そして

「御霊の燈火を灯したら、もはや何をか要せん」と言うわけで、いよいよ勇ましく進んで参ります。

我々は本当に、キリストの身体としての樂しき一体となつて、エペソ書に書いてある通り、

「御霊は一つ、信仰は一つ、希望は一つ」

と、進んでまいります。イエスの靈的実存に、靈的人格に、聖書に深く親しむことによつて、肉薄してきた。それで、私たちは彼らよりも、現実にイエスが伝道しておられた時の弟子たちよりも、もつと深く、質的にはもつと親しく、もつとその中の世界に入つて進んで行くことができる。何というあり難い恩寵かと思えます。それでは、今日はそこまで。

